奥多摩の教育
第 227号
発　行
奥多摩町教育委員会

令和４年２月１日現在
児童数　148名
生徒数　67名
教職員数　48名

6年生 日光移動教室
12月2日～4日実施

古里小学校と氷川小学校合同で、日光移動教室を実施しました。冬にしか味わえない良さがたくさんあることに気付き、大変充実した3日間になりました。

1日目、埼玉県のさきたま古墳群の見学や、日光の独特の文化である日光彫を体験しました。普段の図工で扱う彫刻刀との違いに初めは苦労しましたが、扱いに慣れてくるうちに表現を楽しむ様子が見られました。

2日目は、朝起きて氷点下6度という温度計を見て驚きましたが、空はすっきりと晴れ渡り、気持ちのよい天気でした。その青空の下、戦場ヶ原をハイキングして、日光の自然を満喫しました。ハイキング終了後には、宿の近くで、子どもたちは雪遊びをして楽しみました。古里小学校、氷川小学校入り混じって雪を投げて、大いにはしゃぎまわりました。宿に戻ってから入った温泉は、最高に気持ちがよかったと振り返っていました。

3日目は日光東照宮を見学しました。社会科の教科書やガイドブックからは学べない、歴史的意義がある建造物がもつ重厚で厳かな雰囲気を感じることができ、子どもたちは歴史のロマンを味わっていました。

男体山をバックに

古里小学校、氷川小学校の交流も活発に行われ、中学校への進学の準備も進みました。残りの小学校生活に励んでいってほしいです。

報告　氷川小　服部　志濃生

5年生 伊豆移動教室
12月16日～17日実施

当初、7月に予定していた伊豆移動教室が8月、12月と延期が続き、児童にとって待ちに待った移動教室となりました。

予定では、2泊3日でメインはシュノーケリングでしたが、12月ということで、シュノーケリングを中止して1泊2日の移動教室となりました。5年生にとっては残念なこと続きでしたが、悲しむ様子は一切なく、7月の移動教室直前のテンションのまま、2日間を思いっきり楽しみました。

1日目は、班行動で淡島水族館を見学しました。見学時間が長かったので、子どもたちは島を探検したり島にある山を登ったりと各班、見学だけでなく自分たちから提案して淡島を満喫しました。また、天気も味方をしてくれて、淡島から最高の富士山を眺めることができました。

宿泊先の「いづみ荘」では、日頃の成果が活かされ、宿の方々に「挨拶が素晴らしい。」とお褒めの言葉をいただきました。宿のお風呂は伊豆長岡で最初にお湯が出たところで、友達と大きな湯船に浸かって楽しいひと時を過ごしたようです。

2日目は、まず地引網でした。荒波の中、船を海原に出して網を張ってくれました。地引網で獲れた魚は少なかったですが、みんなで力を合わせて地引網を引いたことは、忘れられない思い出になりました。箱根の寄木細工体験では、世界に一つしかない伝統工芸のコースターを作って、子どもたちは忘れられない2日間を締めくくりました。

報告　古里小　北村朋子

東京都小学生科学展

氷川小学校6年
佐藤 響士郎さん

東京都科学展に、氷川小学校6年、佐藤響士郎さんが「弓の弦最強決定戦」の研究を出展し、優秀賞を受賞しました。

響士郎さんは、自分で作った弓矢で遊んでいた際に、理科の時間に学習した物質によって伸縮性や弾力が違うことを思い出し、弓の弦を変えたら矢が飛ぶ距離が変わるのではないかと考えました。「たこ糸」「縄跳びの縄」の「竹刀のつる」の三種類を用意し、条件を揃えて10回ずつ矢を飛ばすという実験を行った結果、「竹刀のつる」が一番遠くまで矢を飛ばすことができることが分かりました。実験結果から、「竹刀のつる」の丈夫さが、矢を飛ばす際、弓がしなって元に戻るときに生かされていて、それが他の素材のときよりも矢を力強く飛ばしていると結論付けました。

遊びの中から疑問に感じることを見付け、理科的視点で条件を変えるところと変えないところを設け、異なる実験結果から、素材の違いが生み出す力の伝わり方の大小を見付け出すことに成功しました。

昨年度に引き続き今年度も新型コロナウイルスの影響で日本科学未来館での発表は実施されませんでしたが、氷川小学校1階に発表パネルを展示しております。また、東京都教育委員会のホームページでも閲覧することができます。ぜひ一度御覧ください。

実験に取り組んでいる様子

全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会 作文委員会賞受賞

奥多摩中学校3年生の杉村雅さんが、作文委員会賞を受賞しましたのでご紹介します。

奥多摩中学校3年
杉村 雅さん

「私たちができること」

新型コロナウイルスが世界的な規模ではやって一年半が経つ。デルタ株はさらに感染力が強く、私たちのような十代であっても感染するリスクがあるらしい。私の住む奥多摩町でも今現在患者数17名、累計49名となっており、その脅威がだんだん身近なものになってくるのを日々感じている。

奥多摩町では、新型コロナウイルス感染症対策本部から定期的に感染状況が配信されている。その冒頭には必ず同じ文言が記載されている。

「町民皆様には冷静な行動をお願いするとともに感染された方やそのご家族の人権を守るため個人情報の保護に特段のご理解とご配慮をお願いいたします。」学校から配信される内容も同じである。この場合の「人権を守る」とはどういうことだろう。何をすべきだろう。また、何ができるだろう。あるいは、何をしてはいけないのだろう。

私はまず、個人情報を広めない、ということだと思った。誰が感染したとか、どういった経緯で感染したのを口外しない、誰から感染したかとか、今その人がどういう状況なのか、とかを話題にしない。知らない人の場合であっても同様に、詮索しない、話題にしない、興味本位で噂話をしない、そういった情報をSNSにアップしない、などが私たちにできる最低限のことだと思う。

「人権」という言葉について調べてみた。人権とは、「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは、「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持っている権利」であって、だれにとっても大切なもの、日常の思いやりの心によって守ら

れなければならないもの、であると分かった。

もし、仮に不用意に感染した人について話題にしてしまった場合、その人はおそらくとても傷つき、周りから敬遠されてしまうかもしれない。例えば、学校に行きづらくなってしまったり、その辛さをだれにも相談できなくなってしまったりするかもしれない。それが幸福を追求する権利が脅かされるということだと思った。

何も特別に気遣ったり、声をかけたりする必要もない。ただ、今までと同じように接することこそが「日常の思いやりの心」であり、その人にとって一番良い接し方なのではないかと思っている。

感染者やその家族に対する差別や偏見は、ただその人たちが被害を受けるだけでなく、社会全体に悪い影響を及ぼす可能性もある。感染者の名前や学校名がＳＮＳ上にアップされたり、人権を脅かすような書き込みをされたりすることを恐れて、病院を受診することをためらったり、学校を休むことに抵抗を感じたりすることがあるかもしれない。それでは、新型コロナウイルスの収束どころか、さらなる拡大に拍車をかけることにつながってしまう。

インターネットでは、日々芸能人が新型コロナウイルスに感染したと内容の記事が次々と掲載されている。感染の経緯が明らかになっていない場合であっても、憶測や邪推でその芸能人を批判するコメントが目に付く。私はそうしたコメントを見るたびに切ない気持ちになる。匿名という便利な機能を悪用し、批判される人の気持ちを全く考慮しない卑劣な行為だと思う。どうしてそういうことをするのだろう。自分がすっきりするため？冗談交じり？コメンテーター気取り？それが人の心を傷つけるということに気づいていない？私には分からない。仮に自分自身の顔や名前をさらした状態であっても同じことができるのだろうか。そういった覚悟でコメントしているとは私にはどうしても思えない。

一言で「人権」といってもその種類は様々だ。男女差別、高齢者問題、児童虐待、障がい者に対する偏見、外国人に対する差別などが挙げられる。それらを解決するためには、一見すると複雑で困難なもののように思われる。しかしながら、これらすべての人権侵害の根底には、思いやりの欠如があるように思えるのだ。日常の思いやりの心をもって接することができれば、きっと誰もが笑って生きる世の中になると信じている。

子どもからのメッセージ発表会

檜原村役場で開催された発表会で、古里小学校６年生、市川心愛さんのメッセージが発表されましたのでご紹介します。

「コロナウイルスでの差別」

私は、新型コロナウイルスに感染してしまった人への「差別」が問題になっていることを以前ニュースで見たことがあります。

例えば、対策をしっかりしていたのに感染してしまった人に向けてＳＮＳなどで、公表したり、非難をするなどです。こんなことをされたら、心理的に辛くなってしまいます。感染する可能性があるのに、大人数で長時間におよぶ飲食やマスクなしでの会話をしていたら責められても仕方がないと思います。ですが、差別するのはおかしいと思いました。

公表されるだけでなく、仕事を失ってしまった人もいます。かかってしまった人は、これからも生活をしていかなければなりません。生活するには、お金が必要で、お金をかせぐには働かなくてはいけません。新しい仕事は、すぐに見つかるわけではありません。もし、自分が新型コロナウイルスに感染してしまったら、いじめに合うのが心配なので、感染してしまったことをできるだけ言いたくないと思いました。

感染してしまった人を責めたりするのではなく、みんなで思いやりの声をかけてほしいと思います。みなさんも不当な差別やいじめをなくすために、メッセージを送る時にもう一度読み直して、相手がきずつかないかを確認するなど、自分にできることから始めていってほしいと思います。

古里小学校　近況報告

音楽・音読発表会

11月19日・20日に「音楽・音読発表会」を開催しました。

今年度は、感染症拡大防止のため、低学年・中学年・高学年に分けて発表し、20日の保護者鑑賞日は2学年ごとの完全入れ替えで実施しました。

合唱は、全学年で上柴はじめ作曲の楽曲を歌いました。中高学年は合唱組曲「宇宙（そら）」の表現の仕方を、上柴先生から直接指導していただきました。また、中学年は、合唱指導者の前田美子先生のご指導も受けました。2学年一緒に歌うと歌う楽しさも倍になります。低学年はいきいきと元気に、中学年は曲の気分を感じ取って、高学年は曲想の豊かな表現を工夫して歌いました。

3・4年　合唱　「朝が来た　星の花」

合奏では、低学年は器楽演奏の基礎を身に付けながら、中学年は和太鼓や箏の演奏で日本の音楽に親しみ、高学年は音楽室のいろいろな楽器を使って複雑な音の重なる響きで「木星」の世界観を表現しました。

音読の発表は、学級担任の思いが詰まったものになりました。特に、5年生は声の重なりや手話を取り入れ、命の大切さを我々に伝えてくれました。6年生は「人間のうた」と「友よ」を力強く発表しました。その詩は、卒業後もずっと心の中で応援し続けてくれると思います。

コロナ禍で、保護者の皆様のご協力、関係者の方々や地域の皆様のご理解をいただきました。ありがとうございました。

5・6年　合奏　「木星」

校内研究の取組

古里小学校は、今年度「奥多摩町教育委員会研究指定校」の2年目を迎え、2月9日に研究発表を行いました。

研究主題を「自分の考えをもち、表現できる児童の育成」と設定し、6回の研究授業を行いました。低学年・中学年・高学年の3つの分科会に分かれ、低学年「整理の仕方を工夫して」（体育）、中学年「整理の仕方・表現したくなる場を工夫して」（国語）、高学年「整理の仕方・可視化を工夫して」（算数）と分科会ごとに副主題と研究教科を設けて取り組みました。

分科会のメンバーの授業を参観し会う「OJTペア授業実践」も行いました。全6期の期間を設け、設定教科以外でも副主題に沿った授業を行い、研究授業の際の分科会提案で報告しました。それぞれが研究授業とは別に、日常的に授業実践を行いました。

6年　算数　「拡大図と縮図」

研究発表会では、講師として青梅市立第一中学校統括校長の儘田（ままだ）文雄先生をお招きし、パネルディスカッションの中で、研究の講評とご指導をしていただきました。

2年間の研究は終わりますが、これからも古里小学校は研究を続けてまいります。

報告　小野　愛美

氷川小学校 近況報告

学芸会

氷川小学校では、11月19日と20日に学芸会を開催しました。

新型コロナウイルス感染拡大防止の対策として、一家族２名までの人数制限を設け、演じる児童もマスクを着用しました。会場にお越しいただけない方には、ライブ配信も実施しました。児童は制限の多い中でも、観客に伝わる工夫を重ねていました。声量が制限されてしまう分、ゆっくり発声したり、動作をより大きくしたりして演技をした結果、どの学年も表現豊かな劇を創り上げることができました。

３年生　「どろぼう学校」

２年生　「スイミー」

１年生　「おむすびころりん」

６年生　「ピーター・パン」

５年生　「杜子春」

学芸会に取り組む際に、児童一人ひとりに「学芸会を通して、どのような力を身に付けたいのか」を考えさせ、ねらいを明確にさせました。「諦めないで最後までやり切る力を付けたい。」「みんなで協力する力を高めて、よりよい劇にしたい。」と、目指す姿が明確になったことで、現在の到達点を客観的に捉え、できていること・足りないことを自覚しながら練習に取り組むことができました。

報告　野尻 迅人

４年生　「寿限無」

奥多摩中学校　近況報告

国際交流会〈12月16日実施〉

社会の国際化に対応する視野の広い生徒を育成することを第一の目的として今年度の国際交流会が行われました。日本の大学や大学院に留学している留学生が先生となり、自分の母国について講義してくださいました。

今年度は、フィリピン、エジプト、大韓民国からの留学生3人をお招きしました。

感染症を予防するために、握手はもちろん、民族衣装などに直接触れたりという形での交流はできませんでしたが、フィリピンの食文化や、初めて見るアラビア文字に驚き、韓国の受験の厳しさを自分自身に重ね合わせてみたりと、日本とは異なる文化を知ることができました。

また、単に外国についての見識を深めるだけではなく、それぞれの留学生がどのような経緯で日本に留学することになったのか、そして日本で学んだことを自分の将来にどのように生かしたいかなどのお話を聞き、自分のこれからの学びと進路を考える一助にもなるような貴重な時間をもつことができました。

報告　佐藤 修

第2学年　岩原移動教室

「レベルアップするために、自主的に考えて全員で協働し、最高の瞬間を全力で盛り上げよう」とのスローガンを掲げ、1月19日、スキー移動教室は始まりました。コロナウイルス感染拡大で実施が危ぶまれる中でありましたが、さまざまな方の協力を得ながら、感染防止策を十分にとった上で、実施できることになりました。

天気も心配されましたが、関越トンネルを抜けると晴れた空が私たちを迎えてくれました。

ホテルに着き、美味しい牛丼で腹ごしらえをした後、いよいよ講習開始。初級班と中・上級班に分かれての講習です。スキーが初めての生徒もいる初級班。何度も転びながらも諦めず、3日目には何度もリフトに乗って、自由に滑れるようになりました。中・上級班も滑るほどに上達し、3日目には初日と比べると明らかに綺麗なフォームでパラレルターンができるようになっていました。「奥多摩中学校の生徒の上達ぶりには、毎年驚かされます。」と、インストラクターの先生からもお褒めの言葉をいただきました。

スローガンに「自主的に考えて全員で協働し」とあるように、今回のスキー教室は、実行委員を中心に生徒の自主性を尊重しながら、「自分たちの力で考え実行する」力を向上させる機会と位置付けて取り組んできました。生徒がこのスキー教室で育んだ自主性は、周りの方々への自然な感謝の言葉に表れていたように感じます。コロナの終息が未だ見えない中ではありますが、この生徒たちであれば、全ての困難を乗り越えていけると信じています。

報告　浜中 伸良

図書館より　新しい本のご紹介

一般書

きりきり舞いのさようなら　諸田玲子著　光文社

愚かな薔薇　恩田陸著　徳間書店

ミトンとふびん　吉本ばなな著　新潮社

児童書

あ・さ・ご・は・ん！　武田美穂作　ほるぷ出版

ゴリランとわたし　フリーダ・ニルソン作　岩波書店

成人おめでとうございます

成人の日の式典 開催

１月10日に文化会館にて開催されました。新成人対象者32名のうち、27名が出席され、感染防止対策を徹底し規模を縮小して成人を祝いました。

成人の集い 開催

同日、昨年度成人の日の式典が中止となり参加できなかった方々を対象に「成人の集い」を開催し、出席者16名と恩師の方々とともに成人を祝いました。

【学校式典のご案内】

卒業式

古里小学校
３月25日（金）午前９時30分

氷川小学校
３月25日（金）午前９時45分

奥多摩中学校
３月18日（金）午前９時30分

入学式

古里小学校
４月６日（水）午前10時30分

氷川小学校
４月６日（水）午前10時00分

奥多摩中学校
４月８日（金）午前９時30分

※今年も感染症対策のため、規模を縮小して実施しますのでご了承ください。

✿教育相談室より✿

心をひとりにしないために

スクールソーシャルワーカー　**堀部 浩子**

今回は「セルフケア」のお話です。セルフケアとは、「自分で自分を上手に助ける」ことです。ここには、誰かに相談したり助けを借りたりすることも含まれます。「ひとり、孤独に自分を助けること」ではありません。

あるお医者さんが、「自立とは、依存先を増やすこと」と仰っていました。私たちはお互いに頼ったり頼られたりしながら、自立して生きていけるのです。

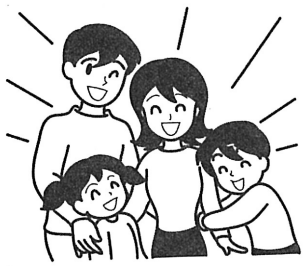
「そうは言っても、私には頼れる人なんていない…」と思う方もいらっしゃるかもしれません。大切なのは、今誰かに頼ることだけではなく、『自分の心をひとりぼっちにしない』ということです。たとえば、心の中で今までお世話になった人や、過去に好きだった人やものを思い浮かべるのも、心理学的には「誰かとつながる」ことになります。

コロナ禍が続いた数年。今まで気軽に会えていた人に会えなくなり、孤独やストレスを感じる時間が長くなりました。

そんな中で危険なのは「どうせ自分はひとりだ」と自分で決めつけてしまうことです。仮に今、助けてくれそうな人がいなかったとしても、心までひとりぼっちにする必要はないのです。今、推し活という言葉が流行っているように、憧れの人や好きなキャラクターだって、大切な「自分を助けてくれる人」です。

相談できそうな専門家や機関に助けを求めるのも、いい方法です。そして実際に相談したら、ぜひ、誰かに相談できた自分自身を褒めてあげてください。「人に相談する」こと自体が、大切なセルフケアなのです。

【☎・FAX】（83）2340
【メール】
okusoudan@town.okutama.tokyo.jp



郷土奥多摩（文化財）

その23 町内のお堂

文化財保護審議会会長　石田充法

奥多摩町の中に文化財に指定されているお堂は3堂あります。このうち棚沢の薬師堂については郷土奥多摩その3で紹介されましたので、ここでは残りの2堂を紹介します。

小河内小留浦の太子堂

このお堂は「小留浦の太子堂舞台」として小道具と共に昭和29年11月に東京都の有形民俗文化財に指定されています。

間口9・09m、奥行き7・67mの寄木造の平屋建です。小河内ダム建設のため水没地から昭和31年現在地に移築されました。茅葺き屋根から現在はトタン屋根に替わっています。背面に突き出した厨子壇があり、本尊の聖徳太子立像（像高30cm・都の文化財指定）と3体の仏像が安置されています。

このお堂の特記すべきところは、舞台としての設えがなされているところです。向かって右側手前に床から156cm程の高さに太夫棚が半分外に張り出して設けてあり、取り外しできる梯子で登ります。特に板敷きの床面には回転装置が造られており、角材でできた四角い回転枠（8個の鉄製の車輪が付けられている）の上に3分割された四角い舞台が乗る仕組みで、奈落（床下）で回さない床上回し式の回り舞台（右写真）になっています。この回り舞台はすべて取り外すことができ、地域の寄り合いや他の出し物などができるように工夫されています。

文久3年（1863年）に焼失しましたが、慶応元年（1865年）に再建されました。山村の小集落の人々が江戸時代末期の混乱期に新形式の娯楽施設を兼ねたお堂を再建したことに驚きます。

丹叟院の阿弥陀堂

このお堂は昭和58年11月に町の有形文化財に指定されています。4・7m四面で宝形造り。もと文化会館の北側にあった旧西光寺の境内にありましたが、昭和53年に丹叟院の現地に移築されました。

このお堂の見どころのひとつは古さにあります。確かな建築年は定かではありませんが大永年間（1521年～1528年）の建立と伝えられ、西多摩地方最古の遺構を持つものといわれています。屋根は茅葺きから銅葺きに替わっていますが、太い梁は斧のようなもので長さを整えた痕があり、軒を支える垂木と床板も裂いて手斧で整え作られている様子が見られることからもその古さがうかがえます。古い柱の跡が長押に残っており、また、外側に小縁がつけられていたと思われる痕も見られることから、何度か改造されたことがわかります。

このお堂の役割も見どころです。一般に観音堂と呼ばれており、本尊は阿弥陀如来ですが、その両翼に34体の観音像が安置され親しまれてきたためと思われます。堂前に建つ「秩父三十四カ所無量山西光寺」の石碑と、お守りのお札「奉納秩父三十四カ所巡拝」の版木が見つかったこと、また、このお堂の観音像と秩父三十四観音霊場の観音像の種類別数が（未判明の像を除き）一致していることから、このお堂を拝めば秩父三十四観音霊場巡拝のご利益を一度にいただける一括巡拝堂であることがわかります。このことは永く忘れられていました。

左面には閻魔大王が安置されています。